

ほっと通信



新年度を迎え 1 ヶ月が経ち、新緑がまぶしい季節となりました。子どもたちも新しい学級や学校生活に慣れ、にぎやかな日々をお過ごしのことと思います。

本年度、特別支援センターは「教育センター 特別支援教育担当」と名称が変わり、研究主事、心理士ともに 1 名ずつ増員いたしました。ほっと通信での情報発信とともに、よりパワーアップして巡回活動をしてまいりたいと思います。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

特集：八王子市の特別支援教育 - 21 年度をふり返って -

特別支援教育担当の昨年度の活動の報告、市内小・中学校の取り組みをご紹介します。

『平成 21 年度をふり返って』

昨年度は特別支援センターとして、65 の小中学校から 254 人の児童・生徒の巡回相談の依頼をいただき、約 600 回学校を訪問させていただきました。

心理士をはじめとする職員は、少しでも子どもたちの支援に役立てばと学校を訪問していますが、訪問を重ねるなかで“素敵な先生”に出会い、「逆に、勉強させていただいた」ということが増えてきたと感じています。多忙な中でも“特別支援教育”というよりは個々の児童・生徒に気をかけていただいているのだなととても嬉しく感じています。

時には、相談が上手く進まないこともありましたが、関係者が一人ひとりの子どもについて話し合うことは“意識して子どもに目を向ける”ことですので、そういう場を持ていただいたこと自体がありがたいことと思います。

今後も、私たちは、一人ひとりの子どものライフステージを見越した巡回相談ができるよう努力してまいります。学校においては、私たちとの係わりを通じて、他の児童・生徒の指導にも生かしていただくことができれば幸いです。

また、子どもたちは、それぞれの地域で生活しています。中学校を卒業するとそれぞれの進路に向かって飛び立っていきます。私たちは、学校関係者以外の方に子どもたちのことを理解していただくことも大切と考え地域セミナーを開催しています。

6 月には、市民活動団体の“ポレポジさぼ〜と”及び“安全ネット八王子”と共催した南雲明彦さんの「ボク、学習障がいと生きてます。」(市のホームページにアップしています。トップ > 教育・生涯学習 > 児童・生徒の保護者の皆さんへ > 特別支援教育)を開催し、少年期から青年期のご自身のお話を聞かせていただくことができました。また、明星大学教授の星山麻木先生の講演、「みたかキャラバン隊モンブラン」の皆さんの疑似体験、「さくらんぼの会」の斎藤理恵子さんの子育ての体験をお話いただくなど、色々なお立場の方からメッセージをいただくことができました。

今後も皆さまにご協力いただき、これらの事業を展開していきたいと思っております。



『中学校通常学級での特別支援教育』

中学校では、卒業後の進路を決定していくという避けては通れない作業があります。誰もが自分と向き合い、将来について考える時期です。そのために担任や教科担任が見て支援が必要と感じる生徒について、本人や保護者が困難さを持っていなくても、積極的に保護者と面談をして、適切な支援を勧めます。

支援センターの方にもご協力いただき、授業観察、必要に応じて検査、そしてその結果をもとにしたケース会議（保護者、担任、センターの方、コーディネーター等）につなげます。その生徒にとって何を、どう支援していくことで将来必要とする力を身につけることができるかを話し合い、本人にもそのことを伝えます。そうすることにより、不安に感じていたことが和らぎ、進路選択に向けて希望が見えてきます。

また、取り出し授業も支援が必要な生徒にとって自己実現のできる場所でした。時間割に合わせて、本人や保護者の要望にも応えて少人数での別室授業を行うことにより、教室では得られない達成感を感じた生徒もいました。

個々により支援の方法も違い、課題も多いですが、通常学級における支援方法のひとつの在り方として成果があったと思います。自分の将来に夢を持ち、その実現の為に努力できるように手助けすることが、学校の中で“支援”という形で実行できればと考えています。

鎌水中学校 主任教諭 横溝 明子先生

* * * * *

『授業で工夫できること あれこれ』

30人以上のクラスになると子どもたちの中には、一斉の指示が通りにくい子どももいます。少し工夫することで、みんながすごしやすくなります。昨年度はコーディネーターとして、学級の先生方に工夫する視点をアイデアとして提供したり、一緒に対応方法について考えたりしてきました。そのアイデアのいくつかをご紹介します。

【聞くこと】

- ・ 指示を明確にする。一時間で学習することを伝えたり、書いておく。黒板にやることを提示しておく。困ったときにはやることが黒板に書いてあると、次に何をしてもよいのかわからなくなるので、安心して活動ができます。
- ・ 言葉かけをするときには、具体的に話す。または、実物を見せて話す。自分がこれからどんな活動をするのかをイメージしやすいです。

【読むこと】

- ・ 読むときにとばしてしまったり、どこを読んでいるのかわからなくなってしまう場合は、指で指したり、マーカーで一行ずつ色をつけるように、指示をする。たくさん文字があると、わからなくなってしまうことがあります。

【書くこと】

- ・ 書くことに抵抗がある場合は、練習量を減らす。
- ・ 漢字については、意味づけして覚えられるように工夫する。
- ・ 2桁のかけ算 算数の式を筆算に直すときに、わからなくなってしまう場合は、かける数とかけられる数をそれぞれ違ったマーカーで囲むとわかりやすい。



【その他】

- ・ 一日の流れを朝確認する。訂正はないほうが望ましいが、天候によって変わることもあるので、その場合は違う色で黒板に付け足すことで、一日の心づもりができます。

ここに書いたのはほんの一例です。研修会で教えていただいたことを試したり、保護者の方との話のなかからヒントをいただいたりして、その子どもに合ったものを見つけられることが大切です。

昨年度はコーディネーターとして、自分のクラス以外の子どもに関して相談を受けたり、保護者と面談したりすることも多くありました。保護者と担任の先生の面談に同席する際には、保護者と担任の関係を良好に保つために、あえて厳しい意見をコーディネーターから伝えることもありました。それは、普段の子どもの様子から、今後起きると考えられる困難さ、将来に向けていましておくべきことなどを情報として提供していくことが、子どもの成長にとって必要だと考えるからです。

今年度はコーディネーターが二人体制となり、より充実した支援をしていきたいと思っています。

松木小学校 教諭 平尾 淳子先生

キーワード

『ユニバーサル デザイン』

近年、特別支援教育のなかでも「ユニバーサルデザイン」ということばを耳にすることが増えてきました。ユニバーサルデザインとは「誰にでも公平かつ自由に使用でき、容易に使用方法や情報が理解でき、無理なく安全に使える(自由国民社『現代用語の基礎知識 2004年版』より抜粋)」とされています。“障害がある人とない人の間の壁をなくす”バリアフリーという考え方から発展し、“どんな人にも公平に自由に使いやすい”ユニバーサルデザインという考え方へと変わってきました。これは、教育の場において特殊教育から特別支援教育へと移行してきたことと考え方が重なる部分があるように思います。

ある小学校で1年生の授業を見学させていただいたときの“ユニバーサルな”工夫をご紹介します。

図工の授業：絵の具を使い、色つけをする活動の導入部分

机に出す道具をイラストと文字で板書する(それを見ながら児童は準備を進める)

一度全員の注意をひきつけ、実物や手本を見せながら口頭で説明をする

一通り口頭での指示・説明を終えてから、同じ内容を箇条書きで板書をする

机間指導を行い、一人ひとりが理解して動いているかを確認、個別の声かけ・フォロー



このように、口頭指示を聞く、文字の説明を読む、絵や図を見る、見本の真似をする...など説明の仕方にも様々な方法があり、どの方法がわかりやすいかは子どもによって違います。学び方のちがいを利用し、いろいろな方法を組み合わせることは、子どもたちの学ぶ意欲を伸ばすことにもつながっていくと思います。

特別な支援が必要な子のためだけでなく、どの子にとってもあると便利な支援、一人ひとりの苦手がつまずきとならないような多様性を活かした支援を探っていきたいですね。

ぽけっと

『 急がず、じっくり 』

ここ数年、特別支援学級を積極的に利用したり、発達の偏りや多動等が気になり医療機関を受診されたりする件数が急増しているといわれています。ところが、巡回相談や発達検査を受けてみませんか？と声をかけられた保護者が戸惑ったり抵抗感をもったりするケースも少なくありません。

一般的には子どものもつ困難さや障害を保護者が受容していくまでには下記のような段階があると考えられており、日ごろから「何かおかしい」と感じている保護者でも実際に発達検査の結果や診断を受け止め、受容していくまでには様々な葛藤があり、時間がかかります。また、一度は受容しても、成長していくなかで新たな葛藤が芽生えたり、課題にぶつかったりすることもあるでしょう。



受容していく段階：

- 衝撃 「まさか！」「やっぱり…」
- 否認 「そんなはずない」「何かの間違いだ」
- 悲しみ 「どうしてこんなことに…」
- 自責 「私のせいで」
- 適応 「仕方ない」「この子はこの子」
- 再起 「よし、がんばろう」「前向きにいこう」

発達検査や医療機関等を利用することは子どもの得意な部分や苦手さを見つけ、よりよく生きていく力を育むためであり、そのためには保護者の理解と協力が不可欠です。保護者と面談したり、検査結果をお伝えしたりする際には、こういった葛藤や揺れがあることを忘れず、保護者のそれまでの取り組みの肯定的な側面やその子どものよさをあわせて伝えるよう心がけています。

急がず、じっくり。保護者の心の揺れを感じることで、それを支えることが間接的に子どもを支えることにつながっていくと考え、今後も先生方と協力しながら支援にあたりたいと思います。

(文責：心理士 渡瀬 恵)

学校サポーター

これまでメンタルサポーターと特別支援サポーターと分かれていたものが、本年度より統合して“学校サポーター”という名称に変わりました。小・中学校に在籍する発達に課題をもつ子ども、いじめや不登校などの様々な課題をかかえる子どもやその保護者に対して支援を行うことを目的に制定されました。一人ひとりの子どもが生き生きとした学校生活を送れるよう、子どもにかかわる人同士が報告・連絡・相談を大切に、手を取り合っていきましょう。

巡回相談のご案内

心理士・研究主事などが、授業観察、聞き取り、ときには発達検査などを通して発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。相談の進め方をご案内いたします。

電話予約 情報共有 日程調整 巡回訪問 (状況により継続相談)

特別支援教育担当： 664-1615 (直通)

